

## わが国で行われてきた母乳哺育終了時の乳房ケアの 歴史：近代の文献からの一考察（研究報告）

著者	新池 里沙子, 立岡 弓子
雑誌名	滋賀医科大学看護学ジャーナル
巻	14
号	1
ページ	41-46
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10422/11615">http://hdl.handle.net/10422/11615</a>

## — 研究報告 —

## わが国で行われてきた母乳哺育終了時の乳房ケアの歴史

## — 近代の文献からの一考察 —

新池里沙子, 立岡弓子

滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座

## 要旨

出産後、母親が継続してきた母乳哺育を終えようとする際に、乳汁うっ滞に伴う乳房痛、うっ滞性乳腺炎などの乳房トラブルを発症することがある。今回、母乳哺育終了時に行われてきた伝承的な乳房ケアを明らかにするため文献研究に取り組んだ。近代の文献から、母乳哺育終了の考え方は時代とともに変化してきたが、徐々に直接授乳回数を減らしていくという終了方法は現在と相通じるものがあり、多くの乳房ケアが近代から現在まで変わらず伝承的に受け継がれてきたものであることがわかった。しかし、これらの乳房ケアは経験に基づく知見が多く、ケアの科学的根拠は示されてこなかった。乳房トラブルを起こすことなく母乳哺育を終了するための支援は重要であり、伝承的に受け継がれてきた乳房ケアについて、今後助産学研究における研究課題として、科学的根拠を検証する必要性が示唆された。

キーワード：母乳哺育終了、乳房ケア、歴史、文献研究

## はじめに

母親が母乳哺育を終える時期や方法について、これまで様々な見解が述べられてきた。現在は、わが国の授乳・離乳の支援ガイドにおいて、子どもが乳汁以外の食べ物から栄養の大半を摂取できるようになる“離乳の完了時期”は、必ずしも母乳哺育終了を意味するものではないと明言されている<sup>1)</sup>。また、母子健康手帳においても、2002年改正時に1歳・1歳半の“断乳”確認項目が削除され<sup>2)</sup>、何歳であっても無理に母乳をやめる必要はなく、子どもから母乳を欲しがらなくなり自然に母乳哺育を終了する“卒乳”という考え方が、母親の間で一般的に知られるようになった<sup>3)</sup>。このような背景から、かつては1歳～1歳半で行われていた“断乳指導”は必要ないものという認識に変化している。

しかし実際には、子どもの成長発達、母親の次子妊娠希望や職場復帰などの理由から、母親側から働きかけて“断乳”を選択する場合も多く<sup>4) 5) 6)</sup>、母乳哺育終了の意思決定の際に終了方法や乳房ケアについて助産師の相談を希望する者も多い<sup>7)</sup>。母親側から母乳哺育終了を働きかけた場合でも、子どもから自然と離れて終了した場合でも、母親はこれまで産生されてきた乳汁の排泄過程が途絶えることで乳管内に乳汁が停滞し、うっ滞性乳腺炎などの乳房トラブルを発症するリスクを有していることから、今改めて助産師による母乳哺育終了時の支援が求められているといえる。

断乳指導が行われていた時代には、乳房に“へのへのもへ字”を書くなど方法で子どもの哺乳意欲を削ぎ、断乳後には助産師による搾乳マッサージで残乳をすべ

て排乳し、乳体部を圧迫して冷罨法で冷やすことで乳汁産生を抑制するという対処方法がとられてきた<sup>8)</sup>。しかしこれらの乳房ケアの根拠は明らかにされておらず、母乳哺育終了時の考え方が現在とは異なることから、この方法が行われることは少なくなっている。

そこで、母乳哺育の文化の根付いたわが国でどのような母乳哺育終了時の乳房ケアが行われてきたのか歴史を遡って抽出し、可能な限り系統立てて整理することを試み、まずは近代の文献から検討を行ったので報告する。

## 研究方法

2013年10月に国立国会図書館近代デジタルライブラリーにて、「母乳」「断乳」「離乳」のキーワードで文献検索を行い、母乳哺育終了に関する記述のある文献を抽出した。はじめに、近代における母乳哺育終了に関する用語、終了時期、終了方法についての記述から、母乳哺育終了の考え方を整理し、各時代の特徴について考察を行った。次に、母乳哺育終了時の乳房ケアや対処方法に関する記述を項目ごとに整理し、現在の考え方と比較し考察を加えた。

## 結果・考察

国立国会図書館近代デジタルライブラリーでは、育児書を中心とした文献24件【文献1～文献24（1875～1943年）】が抽出された。文献リストを表1に示す。

## 1. 母乳哺育終了の考え方

母乳哺育終了時の伝承的な乳房ケアの検証を行うに当たり、はじめに母乳哺育終了の時期や方法などの考え

方について現在と比較検討した。

### 1) 母乳哺育終了の用語

明治時代から戦前の近代では、子どもの歯の生え始めや消化機能の発達に合わせて、乳汁以外の食べ物を与え始め、徐々に母乳をやめていくという考え方が主流であった。母乳哺育終了を意味する用語については、「わが国では古くからだんだんと離乳させる風習の国で、離乳を始める時期は門歯が生えた後としてある様に思われる。わが国においての離乳時期は、生後1年ないし1年半の間が最も適当であろう。」(文献13)のように、“離乳(りにゅう、ちばなれ)”を、“乳汁以外の食べ物を与え始めること”、“直接授乳をやめること”と二つの意味を含めて記述されている文献がみられた。一方で「満11・12か月の頃より徐々に乳離をはじめ、他の食べ物をあげて、だんだん減量していく母乳の栄養を補い、満1歳半より2歳になる頃には全く母乳をやめることが良いとされる。断乳の時期になれば母乳をやめて他の食べ物を与えるべきである。」(文献8)のように、“離乳”を“乳汁以外の食べ物を与え始めること”、“断乳(だんにゅう、ちばなれ、ちちをはなす)”もしくは“絶乳(ぜつにゅう)”を“直接授乳をやめること”とを区別して記述されている文献もみられた。“離乳”の用語への定義づけが行われたのは昭和33年とされており、中尾ら<sup>3)</sup>や、今村<sup>9)</sup>によると、“離乳”という用語は元来、人工栄養がなかった時代に直接授乳をやめることを意味していた言葉であり、人工栄養児が増加した後から固形食の添加の意味づけがされたと述べられていたが、人工乳がわが国で販売される1917年以前から、“離乳”という用語には、“乳汁以外の食べ物を与える”固形物の添加の意味合いも含まれて使用されていたことがわかる。

### 2) 母乳哺育終了の時期

乳汁以外の食べ物を開始する時期については、「生後6、7か月の間に第一歯が生じる頃には必ず哺乳だけで養育してはならない。」(文献7)、「離乳の時期は小児の強弱、発育の遅速により加減するといえども、おおよそ10ないし12ヶ月に至り、乳歯が発生するに至れば母体は乳汁の分泌十分でなくなるようになるので、この時期に至ったら、漸を追って離乳するのが最も適当である。」(文献9)など、文献によって幅があるものの、生後6～12か月頃の子どもの歯の萌出がひとつの離乳食開始の目安とされていた。現在は子どもの必要栄養量増加および定顎や舌の挺出反射消失に関連し、生後5～6か月頃に離乳食が開始されることが推奨されており<sup>1) 10)</sup>、近代では現在よりも離乳食の開始が遅かったことがわかる。これは、現在の離乳食事情と異なり、当時わが国の食事は米以外には干物や味噌汁漬物などが中心で離乳食に適しておらず<sup>9)</sup>、硬さのある食べ物をつぶせるよう歯の萌出を待つ必要があったからではないかと考えられる。

直接授乳を終了する時期の根拠については、「この時期(生後9ヵ月)を過ぎて歯が生え揃っているにも関わらず乳を飲ませたら母親の気力を害し乳の性質を悪くし、ついには親子ともに病気になるかもしれない。」

(文献1)「我が国における断乳の時期は、生後1年より1年半の間が最も適している。もともと、母親の乳汁は、断乳時期になると栄養価値が低くなり、完全な栄養を乳児に与えないだけでなく、この時期まで授乳すれば、同時に母親の体にも疲労を起すものである。」(文献21)

「我が国では、母乳栄養の子どもは、いつまでもだらしなく母乳を与え過ぎ、そのために子どもは普通の食事を十分に食べず、発育が非常に遅れるという例が多く、離乳遅延のために起こる発育不良、栄養不良は、まったく驚くほどである。」(文献24)という記述がみられた。近代の多くの文献では乳汁成分の変化が母乳哺育終了の理由として挙げられていたが、現在産後1年以降であっても乳汁中の栄養価は高く、特に感染防御の働きをするリゾチーム濃度は産後12ヵ月頃の乳汁に高濃度で分泌されることが明らかにされており、栄養面や免疫面からWHOでは2歳以上母乳哺育を続けることが推奨されているため<sup>10)</sup>、この点については科学の発展に伴って変化してきた事柄である。また現在、母乳哺育は子どもの緊張や不安を解消する一つの方法として重要な役割を占めており無理に直接授乳をやめる必要はないと考えられているが、近代では、母親の身体的な疲労、乳汁成分の変化による児の栄養不良、離乳食の遅延などが起こるため、直接授乳をやめる必要性について述べられており、母親達は母乳をやめていくような工夫をしていたと考えられる。

### 3) 母乳哺育終了の方法

実際の直接授乳のやめ方については、「先に乳を飲ませる回数を徐々に減らして、しばらく慣れたら夜中は決して飲ませず、他の食物に慣れさせしばらくその飲食を第一とし最後に母の乳を離れさせる。」(文献1)、「6か月目より24時間に2度ないし3度ずつ哺乳し、それより追々児に断乳させる手続きにとりかかり、乳汁のいづらかをあたえて、製造食物をもってこれに変えるようにすべきである。そうすればその後完全に断乳するべき時期がきて、かねてより慣れているため、母子の身の害となることはない。」(文献3)、「夜のみ哺乳させ、昼は柔らかい食べ物のみを与え少しずつ習慣化させて、最終的に絶乳に行き着くべきである。」(文献6)のように、徐々に直接授乳の回数を減らしながら、乳汁以外の食事を与える量を増やしていく方法が記述されていた。また、最終的に直接授乳を終了する場合には、「たとえば乳房に包帯をする方法や、害にならない膏薬絆創膏の様なものを貼るなどして、なんでも徐々に小児に母乳を諦めさせ、『まあいつの間に乳離れしたのだらう』という様に工夫

することが非常に大切である。乳房に包帯をすることなどは良い方法で、実験上ではこれで断乳の効を奏した。」

(文献13) というように、乳房・乳頭を見せないようにして、子どもの哺乳意欲を削ぐという方法が記述されていた。また、「古来より、こういう場合には乳首に唐辛子を付けたり、からしを付けたりする。害にならない膏薬貼っても良いし、何にせよ子供に母乳を飲ませたら苦いか辛いかして懲りさせるのも断乳法の一つである。」(文献11) というように、からしなど子どもの嫌がる味を乳頭に塗布して哺乳意欲を削ぐという方法を肯定する記述もあったが、「たびたび世間で行われていることで良くないことは、離乳させようとして乳首に唐辛子をつけたり、からしをつけたり、または苦いものを塗りつけて、小児を驚かせるような残酷な方法であり、無理に離乳をさせなくても他に良い方法はたくさんある。」

(文献13) など、そのような方法について否定的な記述もみられた。直接授乳のやめ方の考え方は、1980～1990年頃には、予め断乳日を決めてその日までは十分に母乳を与えて、断乳日には“へのへのもへ字”を乳房に描き母乳意欲を削ぐなどして、きっぱりと直接授乳を中止するという方法がとられていたが<sup>8)</sup> 12)、さらに古い近代では、徐々にやめていくという方法が行われていたことが明らかとなった。現在では母乳をやめる必要性がないという考えから“授乳・離乳の支援ガイド”でも直接授乳の終了方法についての提示はなく、“離乳食の進行時にも母乳は子どもの欲するままに与える”と記載されており終了方法については言及されていない。しかし、様々な事情で母乳哺育を終了する場合には、母乳をやめる1ヵ月くらい前から母乳をやめる準備をする方法や<sup>13)</sup>、2、3日ごとに1回ずつ授乳回数を減らすようにする方法<sup>14)</sup> が知られており、このような終了方法の考え方は現代と現代で相通じるものがあつた。

## 2. 母乳哺育終了時の乳房ケアの考え方

### 1) 乳頭刺激の回避

母乳哺育終了時の乳汁の産生・分泌の抑制方法の中心になるのは、近代から現在まで変わらず、“母乳を与えない”ということであつた。多くの文献に徐々に授乳の回数を減らしていくという内容が記載されており、「乳汁分泌は乳児が乳頭を強く吸引すればするほど旺盛となるもので、すわねば漸次減少していく。」(文献23) とあり、母乳を与える回数が減れば自然と乳汁の産生や分泌が減っていくということが経験的に知られていた。また搾乳についても、「万が一乳房が乳汁で満ちる事が治まらない時には、決して搾ってはいけない。」(文献2)、「乳の張りを緩めるため少し散らす(搾る)のはよいが強くしない、時々乳汁を吸い出す張りが緩む以上にたくさん吸い出すことは良くない。」(文献3) とあり、直接授乳や搾乳による乳頭刺激により

乳汁の産生・分泌が誘発することが認識されて、できるだけ乳頭への刺激を与えず搾りすぎない方がよいという考え方であつた。1980～1990年代の予め断乳日を決めて直接授乳の終了を行う場合の指導としては、桶谷式断乳で、最後の直接授乳以降3日目、10日目、24日目に助産師が断乳療法(乳房マッサージおよび排乳)を行いそれ以外の搾乳は乳房の圧を抜く程度とされており<sup>8)</sup>、根津によって提案された断乳方法は、断乳日から4日目までは1日1回すっきり搾りをするまで搾乳し、それ以外は苦痛の有る場合に圧抜き程度の搾乳を日に3～4回行い、以降6日目、13日目、27日目にすっきりするまで搾乳をする<sup>12)</sup> とされているが、近代にはこのようなすっきりと搾り切る搾乳方法や、助産師による排乳方法についての記載は認められなかった。現在の母親が希望して母乳哺育を終了する場合の直接授乳のやめ方の考え方は近代と似ており、徐々に直接授乳回数を減らしていくという方法をとる場合には、近代から受け継がれてきた乳房緊満時に軽く搾る程度の搾乳を行うという方法が、乳頭への刺激を与えないことで乳汁産生ホルモンであるプロラクチン分泌の誘発を阻害するため<sup>15)</sup>、理にかなっていると考えられる。母乳哺育終了時の搾乳のケアについては、吉留らにより桶谷式断乳の乳房マッサージ直後の乳房緊満軽減への効果を報告されているが、母乳哺育終了後の乳汁産生・分泌量の評価は行われておらず<sup>16)</sup>、これまで十分に検証が行われていない。母乳哺育終了後には、乳房トラブルのリスクがあり、予防するための適切な搾乳方法についての検証が必要であると考えられる。

### 2) 乳房圧迫

乳房圧迫については、「小児すでに他の食物に移り慣れて、乳房全く不要となった場合は、乳房を綿あるいは清潔な毛布にて覆い、軽くこれを包帯するのがよい。」

(文献9) など、いくつかの文献に記載されており、現在でも乳汁の産生・分泌の抑制の方法の1つとされているが、「乳房に包帯をして乳が見えないようにしておく子供はとうとう乳の味を断念するものである。」(文献14) のように、子どもに乳房を見せないようにする工夫の意味づけもあつたことがわかる。母乳哺育終了時の乳房圧迫については海外でも古くから行われていたと報告されているが<sup>17)</sup>、その科学的根拠は明らかにされていない<sup>18)</sup>。

### 3) 乳房冷電法

現在、乳房の冷電法は母乳哺育終了時に一般的に行われている乳房ケアであるが、近代の文献では乳腺炎の予防や治療の視点で「乳腺の硬結を揉み、あるいは氷嚢で冷却する」(文献16) などが記載されているのみで、母乳哺育終了時のケアとして記載されている文献は見当たらなかった。近代では通常の児の成長発達に伴う母乳

哺育終了時に、乳房冷罨法のケアは行われていなかったことが明らかとなった。徐々に直接授乳回数を減らしていく方法を行っていた近代では、冷罨法を要するほどの乳房トラブルがなかった可能性も考えられ、乳房ケアの歴史の変遷を概観し、よりよい母乳哺育終了方法について検討していくことが求められる。

#### 4) 食事・水分の制限

近代の文献では、「食物はこれを減らし、水気を好きなくして、滋養になるものを求めるべきである。しかし、のどが激しく乾くときには、「トースト」あぶって飲料の中に入れたパン及び水にて口を荒い、これを和らげるべきである。その他、一日の中に橙1、2個または少しのブドウを食べてもよい。この手段を用いれば、乳が強く張ることで起こる苦痛の、今までの身を悩ますものを除くことができる。」(文献3)、「余分に出すぎる場合にはどうしたら良いかという、しょくもつを控え目にするのが最も善良な手段で、この方法が素人にもできやすい安全な良策である。けれど、極端に食物を控え目にして体の健康を害すような拙劣な方法をとってはならない。」(文献12)など、母乳哺育終了時に食事量や水分量を減らすということが多くの文献で記載されていた。現在でも授乳期に付加していた食事摂取量は減らしていくため、このような考え方は近代から現在まで受け継がれている考え方であるが、食事や水分摂取量制限の乳汁産生・分泌抑制への明らかな根拠は示されていない。

#### 5) 植物油や薬剤の塗布

また、現在では行われていない乳房ケアとしては「複方石鹼軟膏3オンス、阿片チンキ3g、龍腦軟膏3g(刺激が強い場合は、複方石鹼軟膏のみを用いる)の軟膏塗布をリンテンないしフラテルに一層または二層になるようにのばし、これを暖めて乳房に貼って、油絹にてその上を覆い4~5時間ごとに温めた甘扁桃油で、5~10分の間乳をこする。皮が薄くて感じやすいために、複方石鹼軟膏さえも甚だ刺激を催して、乳房ことごとく擦りむくことがある。このようなときには、その代わりに麵包の水巴布を貼るのがよい、もちろん、温めた甘扁桃油を前のように用いることを要す。」(文献3)のように、爽快感をもたらすような植物や薬剤を利用した乳房ケアが近代には行われていたことが明らかとなった。

#### 6) 排便コントロール

その他、「塩性緩下剤の内服」(文献3)や、「栄養分の多い食物を全くやめて、大便の通じを良くする方法をするのが良い。」(文献10)など、便通を良くすることで、乳房緊満を軽減するという記述がかかれていたが、これらは現在では聞かれることは少ない。このように、近代では行われていたが、検証されることなく現在では廃れていった母乳哺育終了時の乳房ケアも存在していた。

## おわりに

今回、母乳哺育終了時の考え方について、近代では離乳食の開始は歯の萌出が目安とされていたこと、離乳食の開始とともに母乳哺育は徐々に終了していたこと、母乳哺育終了時には乳房を見せない工夫をしていたことが明らかとなった。また乳房ケアについては、乳汁産生・分泌抑制に向けて直接授乳回数を減らし搾乳はできる限り行わないことが最も効果的であり、補助的に乳房圧迫や食事・水分制限、排泄促進、爽快感のある植物を使用したマッサージが行われていたこと、冷罨法はあまり行われていなかったことが明らかとなった。終了時期や終了の必要性については現在と見解が異なるものの、徐々に直接授乳回数を減らしていくという方法は現在と相通じるものがあり、伝統的に行われてきた乳房ケアもまた、現在まで受け継がれてきたものが多かった。しかし、受け継がれてきたものから廃れたものまで、その乳房ケアの根拠については十分に検証されてこなかった。核家族化、小子化の現在、母親達は母乳哺育の終了について身近な者から伝えてもらう機会は少なく、乳房ケアの担い手である助産師による支援が求められている。助産師は専門家として、その母子に合った母乳哺育終了方法を考慮した上で、適切な乳房ケアや対処方法の提供できるよう、産婆時代からこれまで受け継がれてきた貴重な乳房ケアに対して、今後は科学的根拠に基づいた助産学研究を行い、より質の高いケアを提供していくことが重要な課題であると考えられる。

## 謝辞

今回文献研究を行うに当たり、古文の現代語訳に協力して下さった、助産師の加藤沙矢香さん、滋賀医科大学医学部看護学科助産学選抜履修生の西影麻美さん、板東恵さん、井上薫さん、西沢由衣さんに感謝いたします。

## 文献

- 1) 厚生労働省：授乳・離乳の支援ガイド. 2015-12-5 (入手日)  
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/03/d1/s0314-17.pdf>
- 2) 厚生労働省：「母子健康手帳改正に関する検討会」の報告について. 2015-12-5 (入手日)  
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/0111/s1130-1.html>
- 3) 中尾優子, 前田規子, 宮原春美：「卒乳」…乳離れ・離乳・断乳との概念関係に関する一考察… 長崎大学医学部保健学科紀要, 14(2), 65-69, 2001.
- 4) 齋藤啓子, 三木章代, 中澤京子, 小川佳代, 寺尾紀子：乳幼児期の離乳に影響をおよぼす要因の検討, 四

- 国大学紀要, (B) 31, 35-40, 2010.
- 5) 吉川芙蓉, 立岡弓子: 授乳終了の要因・選択方法と日常生活の変化, 滋賀母性衛生学会誌, 14, 11-16, 2013.
  - 6) 笹川朝子, 黒田緑: 卒乳・断乳の決定に影響を与える要因, 旭川医科大学研究フォーラム15, 18-26, 2014.
  - 7) 筒井真弓, 池添紀美代, 十河幸恵, 関亦頼子, 高井佳美, 加藤淑美: 母乳・授乳に関する電話相談内容の分析, 香川母性衛生学会誌, 12 (1), 56-60, 2012.
  - 8) 桶谷そとみ: 桶谷式乳房管理法の実際 I (実技編) 第4版. 78-82, 鳳鳴堂書店, 東京, 1992.
  - 9) 今村栄一: 離乳食, 幼児食に関する研究—わが国の離乳の経緯, 平成3年度厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究」, 729-732.
  - 10) World Health Organization: 10 Facts on breastfeeding. 2014-11-22 (入手日)  
<http://www.who.int/features/factfiles/breastfeeding/facts/en/>
  - 11) 南部春夫, 太田八千雄, 服部哲夫, 三浦正次: 離乳と断乳「自然卒乳の提唱」, 周産期医学, 26(4)525-530, 1996.
  - 12) 根津八紘: 乳房管理学, 138-143, 諏訪メディカルサービス, 長野, 1991.
  - 13) 橋本武夫, 南部春夫, 岡村博行, 永山美千子: 母乳育児シリーズ2 卒乳—おっぱいはいつまで—, 61-62, 日本母乳の会, 東京, 2004.
  - 14) 本郷寛子: 乳離れ・卒乳, NPO法人日本ラクテーション・コンサルタント協会(編): 母乳育児支援スタンダード, 328-338, 医学書院, 東京, 2007.
  - 15) Gordon L. Noel, Han K. Suh, Andrew G. Frantz: Prolactin release during nursing and breast stimulation in postpartum and nonpostpartum subject. *Journal of Clinical Endocrinology & Metabolism*, 38(3), 413-423, 1974.
  - 16) 吉留厚子, 小西清美: 断乳時の桶谷式乳房マッサージによる主観的不快症状, 乳房緊満および乳房表面皮膚温度の変化, 日本助産学会誌, 20(1), 60-68, 2006.
  - 17) Alison M Spitz, Nancy C. Lee, Herbert B. Peterson: Treatment for lactation suppression: Little progress in one hundred years, *American journal of Obstetrics & Gynecology*, 12, 1485-1490, 1998.
  - 18) Oladapo OT, Fawole B: Treatment for suppression of lactation (Review), *ochrane Database of systematic Reviews* 9, 1-118, 2012.

表1 文献リスト

No	出版年	タイトル	著者	出版社
1	1875 (明8)	母親の心得 上	クレンケ・ハマルトン	近藤鎮三
2	1879 (明12)	婦女性理一代鑑	那晋平斯	司命堂
3	1881 (明14)	母親の教	トーマス・プール	丸善
4	1891 (明24)	育児談	足立寛	日本赤十字社
5	1896 (明29)	育児必携	中井辰之助	成功堂
6	1901 (明34)	普通育児法	木村鉞太郎	金港堂
7	1902 (明35)	嬰兒教養 (子女教養全書; 第1編)	下田歌子	古川勝次郎
8	1903 (明36)	通俗小児衛生学	小林信義	丸善
9	1904 (明37)	実用産婆学	鈴木喜代ノ助、 三尾太伝次	南江堂
10	1905 (明38)	育児のはなし	唐沢光徳	吐鳳堂
11	1907 (明40)	実験上の育児 上	瀬川昌耆	新橋堂
12	1907 (明40)	実験上の育児 下	瀬川昌耆	新橋堂
13	1908 (明41)	育児学	岩淵豊治	東京産婆看護婦講習会出版部
14	1909 (明42)	実験小児哺育法 健康児の巻 虚弱児の巻	小松貞介	日高有倫堂
15	1910 (明43)	妊婦必読安産の心得	吉田賢子	宇宙堂
16	1911 (明44)	新撰育児法講義	大久保直穆	朝陽堂
17	1913 (大2)	小児栄養法 (近世眼科学補遺; 第5巻)	平井毓太郎編	吐鳳堂書店
18	1913 (大2)	婦女の菜	川俣馨一	東京女子家政学院
19	1918 (大7)	小児ノ栄養發育衛生	高洲謙一郎	南山堂書店
20	1919 (大8)	最新産婆看護婦講習録 産婆科第2巻	大日本聯合女子青年団	日本産婆看護婦養成所
21	1919 (大8)	女子としては是丈は心得おく可し	岡部稲子	春江同
22	1919 (大8)	家庭の菜	日本女子家政学院	日本女子家政学院
23	1936 (昭11)	技能修練育児教範	大日本聯合女子青年団	社会教育会
24	1943 (昭18)	乳幼児の育成	大政翼賛会文化厚生部	翼賛図書刊行会